

宗祇の時雨（一）

土田龍太郎

種玉庵宗祇の長享二年にかの水無瀬離宮の跡にて肖柏宗長と催しやがて後鳥羽院御影堂に納めまゐらせし百韻、水無瀬三吟とてことに名に立てれど、宗祇の一座せし連歌これにしも限らざるはさることにて、今に遺れるをただ數へあげむもさらにたやすからざるべし。同じ宗祇の十七字の發句ばかりものせしをりまた少からず。かかる發句千五百あまり輯めて成りし宗祇發句帖今に傳はりたれど、これ宗祇みまかりて後に肖柏の編めるもののごとし。自然齋發句じねんさいほつくとも呼びならはせるこの冊子、ただうち見るだに目にとまる佳句少からねば、めでたくおもしろきこといはむかたなし。

時雨るるころ旅路にてふと口より出でしかの名吟、同じ發句帖に入らでやむいはれあるべからず。

世にふるもさらに時雨のやどりかな

といへるその一句、時の人ほめののしりてやまず、宗祇の名をいとど高からしめたり。初め萱草に入りたるこの句、かの應仁文明の亂れにあひて信濃の山中にさすらへしとき、をりからの定めなき時雨の空になぞへつつ、世に經るおのが身のよるべなくはかなきさまを述べたれど、やるかたもなきその思ひわづか十七字の内によくこもれりと言ふをうべし。

自然齋の至れるさかひの世のなみなみの歌人連歌師俳諧師のえ及ぶきはにはあらざること、げにこの一句を見れば否みがたかるべし。

かの芭蕉翁、自然齋を慕ひしあまりにや、天和の初つ方、雨のわび笠を手づから張りしとき、

世にふるもさらに宗祇のやどりかな

の一句をものしたり。

（平成三十一年一月二十九日受附）